

編 集 後 記

本号では原著1編，総説2編，症例報告10編，臨床経験1編を掲載することになりました。どの論文も，消化器外科医が興味を持てる内容と評価しております。本誌に掲載されるまでには，査読，修正を繰り返して採用される場合が多く，筆者，査読者ともに体力？知力？を注入した成果であります。机の隅に積まれるのではなく，ぜひ，一読していただくようお願いいたします。

さて，原著の孝富士論文はディスプレイ手術材料についての報告ですが，最近，ディスプレイ手術器具がとて多くなったと感じるのは私だけではないと思います。この論文を読みながら，医療経済，ゴミ問題などいろいろ考えてしまいました。手術時には，術着，コンプレッセン，電気メスなどいろいろなディスプレイ手術器具を使用します。鏡視下手術では，ポート，鉗子，シーリング装置など，さらにその品数が増えます。これらすべてが，医療ゴミとなるわけです。病院全体で考えるといろいろな診療科が手術を行いますから，そのゴミはかなりの量に達するはずで，世間ではゴミを減らそうと叫ばれています。医療においても放置できない重要な問題です。「使い捨て万能主義」がまかり通りがちな病院にあって，一般に言われる「ゴミはなるべく出さない」ことを原点とする意識改革が必要でしょう。また，最近の手術ビデオでは高額なディスプレイ手術機器を多数使用しているものも良く見かけますが，「コストは？」と要らぬ心配をしてしまいます。病院も収入は重要です。最新の技術，器械とともに，バランスの良いコスト意識も必要です。

いろいろ思うところを書きましたが，論文の投稿は，すればするだけ，確実に評価され，自分自身のためにもなります。今後も，さらに積極的な論文の投稿を期待します。

(竹山廣光)